

論文番号	1 (第 11 回研究会 2013.11.23 於 恵泉女学園大学)
タイトル	日本語と韓国語のあいづち使用についての一考察－韓国人学習者に注目して－
著者名(所属)	山本花江 (恵泉女学園大学大学院 人文学研究科修士課程)
連絡先 Eメール	k12cc005@keisen.ac.jp
<p><b>論文内容</b></p> <p>(背景および研究目的)</p> <p>あいづちは会話の潤滑油であるとされており、日本語教育でも取り上げる必要があるものである。しかし、日本語母語話者の日本語におけるあいづち研究は進められてきているが、日本語学習者のあいづちに関する研究はほとんどなされていない。日本語の会話においてあいづちが果たす役割を考えると、日本語学習者がどのように日本語のあいづちを習得し、どのような点があいづちの習得の困難点となるのか。このようなことを明らかにしていく必要性も高いと言える。</p> <p>そこで本発表では、日本語母語話者と韓国語母語話者の比較、さらに日本在住の韓国人学習者と日本語母語話者との比較を通して、それぞれの会話の場におけるあいづちの使用実態を明らかにする。そして、それを通して、韓国人学習者が日本に来て、暮らす中で、日本語のどのようなあいづちをどの程度習得できているのか、またいないのかということ明らかにすることを目的とする。</p> <p>(検討方法等)</p> <p>資料としては、日本語母語話者同士の会話、韓国語母語話者同士の会話、韓国人学習者と日本語母語話者との会話を各 2 例ずつ録音録画したものを用いる。15 分ずつ録音録画を行ったうちの 5 分間を対象とし、言語行動だけでなく非言語行動も含め、あいづちをその表現形式と機能の点から分析する。</p> <p>(結果および考察)</p> <p>その結果、日本語母語話者と韓国語母語話者との比較からは、言語行動、非言語行動ともに用いる形式、用い方が異なっていることがわかった。言語行動では両者ともにあいづち詞のあいづちを最もよく用いており、その機能も上位 2 つは「同意の信号」と「聞いているという信号」で共通していた。しかし、3 番目によく用いられる機能が日本語母語話者は「理解したという信号」であったのに対し、韓国語母語話者は「感情の表出」であり異なっていた。また、韓国語母語話者は実質発話の形式によるあいづち、「否定の信号」の機能をよく用いており、この点で日本語母語話者との間に違いが見られた。</p> <p>非言語行動では、両者ともに最もよく用いているのは「うなずき」であったが、両者の間には約 300 回、20%の差が見られ、その用い方も異なっていた。また、韓国語母語話者は首ふり、笑いの形式をよく用いていること、その笑いの用い方も日本語母語話者が笑いを聞き手が用いるものとしているのに対し、韓国語母語話者は話し手が用いるものとしている点で違いが見られた。</p> <p>韓国人学習者と日本語母語話者との比較からは、韓国人学習者はあいづち詞の機能が日本語母語話者と同じ結果となっており、実質発話の形式、否定の信号をよく用いるということも見られなかった。非言語行動においても、韓国人学習者はうなずきを用いる割合が増え、日本語母語話者との差が約 100 回、1%多いという結果となっており、用い方も日本語母語話者の結果に近づいていた。そして、首ふりと笑いをを用いる割合が減り、笑いの用い方も日本語母語話者の用い方に近づいていた。</p> <p>(結論)</p> <p>これらのことから、日本語母語話者と韓国語母語話者とは言語行動、非言語行動ともに用いる形式、用い方が異なっており、会話の場におけるあいづちの役割が異なるということがわかった。そして、日本在住の韓国人学習者は言語行動、非言語行動ともに日本語母語話者の結果に近づいてきており、韓国語の用い方から日本語の用い方へと変化してきていることがわかった。</p> <p>日本在住の韓国人学習者は言語行動、非言語行動ともに、また表現形式、機能の両面から日本語のあいづちを習得してきていると言える。</p>	
<p><b>主な参考文献</b></p> <p>水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態－あいづちの分析－」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二言語学編』三省堂</p> <p>任・李 (1995) 「あいづち行動における価値観の韓日比較」『世界の日本語教育』5号 国際交流基金日本国際センター</p> <p>堀口純子 (1990) 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』71号 日本語教育学会</p>	